

平成19年度病害虫発生予報第1号

平成19年 4月 5日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要 [参考]

区 分	農作物名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	苗立枯病	-	平年並
	オオムギ	赤かび病	早 い	やや少ない
		うどんこ病	早 い	やや多い
		小さび病	早 い	少ない
		網斑病	-	平年並
果 樹	ナシ	黒斑病	やや早い	平年並
		黒星病	やや早い	平年並
		赤星病	平年並	平年並
		ハダニ類	やや早い	平年並
		カメムシ類	やや早い	平年並
野菜・花き	ラッキョウ	灰色かび病	早 い	平年並
	スイカ・メロン	アブラムシ類	平年並	平年並
	タバコ	黄斑えそ病	平年並	平年並

気象予報（抜粋）

1か月予報（3月31日～4月30日：3月30日、広島地方气象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の前半を中心に寒気の影響を受ける時期がある見込みです。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



普通作物

[イ ネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報によると、天気は数日の周期で変わり、期間の前半を中心に寒気の影響を受ける時期があると予想されている。

イ 苗立枯病の予防防除が広く普及している。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 主要農作物病害虫防除指針等を参考にして予防防除を行う。

イ 近年、リゾプス属菌やトリコデルマ属菌による苗立枯病の発生がみられるので、育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。

ウ ムレ苗が発生した場合には、タチガレエース液剤の500～1,000倍液(使用回数1回)またはタチガレン液剤の500～1,000倍液(使用回数1回)を箱当たり0.5リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

[ム ギ(オオムギ)]

1 赤かび病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 早い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 本年は、二条オオムギでは、平年より早く出穂し、六条オオムギについても、平年より出穂期が早まることが予想されていることから、気象条件は本病の発生を助長しないと考えられる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本県では近年発生が目立ってきているので注意し、防除を徹底する。

イ 特に六条オオムギは、二条オオムギに比べて本病が発生しやすいので注意する。

ウ 発生後の防除は困難なため、予防防除を基本とする。六条オオムギでは穂揃い期およびその7～10日後、二条オオムギでは穂揃い期に薬剤防除を行う。

エ 防除薬剤は、トップジンM粉剤(4kg/10a)、トップジンM水和剤(1,000～1,500倍液)、チルト乳剤25(1,000～2,000倍液、使用液量60～150リットル/10a)などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月2日現在、発生ほ場率は55.6%であり、3月3日の調査時(発生ほ場率: 22.2%)に比較して発生が拡大している。

イ ムギの生育は、平年に比べて茎数が多くなっている(二条オオムギ)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉色が濃く、過繁茂のほ場では多発の恐れがあるので注意する。

イ 主要農作物病害虫防除指針などを参考にして、発病初期に防除を行う。

3 小さび病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 早い

発生量 少ない

(2) 予報の根拠

ア 近年、発生はほとんど認められていない。

イ 2月~3月上旬頃の気温が高く、ムギの生育も平年に比較して早い。

(3) 防除上注意すべき事項

主要農作物病害虫防除指針などを参考にして、発病初期に防除を行う。

4 網斑病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月2日現在、発生ほ場率は77.8%と平年並の発生となっている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生ほ場では、出穂期~穂揃い期にチルト乳剤25(1,000倍液、使用液量60~150リットル/10a)を用いて防除を行う。

イ 本病は種子伝染するため、発病ほ場から採種しない。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 本年のナシ園における病芽および枝病斑上の越冬菌密度は、全般的に平年に比べてやや低い、一部のナシ園では、越冬菌密度が県平均に比べてやや高い園が認められた。

イ ナシの開花時期は平年よりやや早いと予想されており、発生時期は平年よりやや早いものと見込まれる。

ウ 向こう1か月の気象予報から発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 開花前～人工交配終了後に、伝染源となる病芽の除去を徹底する。
- イ 開花期に病原菌が雌しべに侵入することがあるので、開花前～人工交配直後の薬剤防除を徹底する。
- ウ 薬剤は開花始めにジアリン水和剤600倍液またはジラム・チウラムフロアブル剤(ダイボルトまたはパルノックス)500倍液、人工交配終了後にフロンサイドSC2,000倍液またはベルクガード水和剤500倍液、落花期に有機銅フロアブル1,000倍液などを散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県内巡回調査園(幸水および豊水)における病芽率は1.5%(平年1.8%)で、越冬菌密度はほぼ平年並であった。
- イ 越冬伝染源からの胞子の飛散は3月第4半旬から始まっており、飛散開始時期は平年と比べてやや早かった。
- ウ 向こう1か月の気象予報から発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア りん片の脱落の悪い腋花芽は芽基部病斑を形成しやすく、本病の伝染源となるので、これらを開花始め～落花期に見回って切り取る。
- イ 開花期に降雨が続くと多発しやすいので、開花前～落花期の防除を徹底する。
- ウ 薬剤は、開花始めにアンビルフロアブル1,500倍液、落花期にEBI水和剤(スコアまたはマネージ)4,000倍とジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトまたはパルノックス)500倍の混用液などを散布する。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場のビヤクシン上における冬胞子堆の形成量は、ほぼ平年並であった。
- イ 4月4日現在、伝染源となるビヤクシン上の冬胞子堆の膨潤は確認されていない。
- ウ 向こう1か月の気象予報から発生時期および発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ビヤクシン類が果樹園の近くにあり、4月中～下旬に雨が多い場合、発病しやすくなるので注意する。
- イ 冬胞子堆の膨潤と小生子の飛散最盛期は、例年、満開前後の降雨直後となるので、この時期の防除を徹底する。
- ウ 薬剤は、開花始めにアンビルフロアブル1,500倍液、落花期にEBI水和剤(スコアまたはマネージ)4,000倍とジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトまたはパルノックス)500倍の混用液などを散布する。
- エ 5月以降に葉の発病がみられるときは、EBI剤(スコア顆粒水和剤4,000倍液、マネージ水和剤4,000倍液、アンビルフロアブル1,500倍液など)などを追加散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 越冬密度が高い園では、ハダニ類がすでに花蕾に集合しており、発生時期は平年よりやや早い。

イ ハダニ類の越冬密度はほぼ平年並である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 蕾や葉に発生が認められた場合は、開花始めまでにコロマイト乳剤1,500倍液などを単用散布する。

イ ハダニの発生が多く認められる園では、薬液が葉裏によくかかるように丁寧に散布する。

5 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クサギカメムシの越冬成虫数は、トラップ(簡易小屋)当たり8.8頭(平年:8.7頭)で平年並であった。

イ ナシの開花時期は平年よりやや早いと予想されており、春季におけるナシ園への成虫の飛来時期は、平年よりやや早い4月中旬~5月中旬頃が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 山間地および民家近くの果樹園で例年発生が認められる園では、春期の被害が予想されるため、成虫の飛来を注意して観察する。

イ ナシ園への飛来が認められた場合は、直ちにジノテフラン水溶剤(アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤)2,000倍液などを追加散布する。

野菜

[ラッキョウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 早 い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 本病の初発生時期は、平年に比べて早い1月中~下旬であった。

イ 3月下旬現在、現地ほ場における本病の発生量は、全般的には平年並であったが、一部で発生はやや多い圃場が認められた。

ウ 本病は春先の気温が高く、降雨が続くと発病が増加しやすい。向こう1か月の気象予報によると、今後の気象経過は本病の発生にやや助長的であると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本年は暖冬の影響により、本病の発生が早まっているため、本病の防除期間が例年に比べて長期化している。このため、防除間隔が空きすぎないように注意して、4月下旬まで以下の薬剤を輪番に使用する。薬剤はフロンサイド水和剤2,000倍液、ダコニール1000の1,000倍液、ロブラール水和剤

- 1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,500倍液などを散布する。
- イ 降雨後には、枯れた葉上に多数の分生胞子を形成するので、降雨後の防除を徹底する。
- ウ 窒素肥料の過多などによって茎葉が過繁茂となったラッキョウは、株元に薬液がかかりにくい状態となっているので、丁寧に散布する。

[スイカ・メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(東伯郡北栄町、露地ほ場)における黄色水盤への有翅虫の初飛来は、3月10日であったが、その後の誘殺は確認されていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 葉裏を注意して観察し、初期防除を徹底する。

ウ スイカにおいて、ハウス栽培では交配前にミツバチへの影響のないチェス水和剤3,000倍液を散布する。トンネル栽培ではつる引き誘引時期に、チェス水和剤3,000倍液を、交配前にバリアード顆粒水和剤4,000倍液を散布する。

エ メロンでは、チェス水和剤3,000倍液、バリアード顆粒水和剤4,000倍液、DDVP乳剤(ホスピット乳剤、DDVP乳剤50など)1,000~2,000倍液、モスピラン水溶剤8,000倍液などを散布する。

[タバコ]

1 黄斑えそ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

アブラムシ類の発生時期および発生量が平年並と見込まれることから、本病のアブラムシ類によるジャガイモからタバコへのウイルスの伝搬、発病時期および発生量も平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 近隣にジャガイモを栽培している場合は、伝染源となるので掘り残しイモをすべて除去する。

イ ジャガイモやタバコを透明寒冷紗などにより被覆栽培することによって本病の伝染を防ぐ。

ウ タバコとジャガイモに対して同時期にアブラムシ類の防除を行う。薬剤は、タバコにはベストガード水溶剤2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液など、ジャガイモにはベストガード水溶剤2,000倍液、アドマイヤー水和剤の1,000~3,000倍液、またはランネット45水和剤の1,000~2,000倍液などを使用し、4月下旬頃から定期的に薬剤散布を行う。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守しましょう。

周辺への飛散には充分注意しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、フェロモントラップの調査結果、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.oce.ne.jp

次回の予報発表は、平成19年4月26日(木)の予定です。